異世界逃避行幻想譚～異世界人と巫女達と神々と時々邪神～

架引

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界逃避行幻想譚～異世界人と巫女達と神々と時々邪神～

【Ｎコード】

Ｎ３８５２Ｚ

【作者名】

架引

【あらすじ】

この作品は、作者の作品『邪神を宿した少女と異世界の少年』のリメイク版です。

何の変哲もない高校生生活を謳歌していた少年は、突如発生した空間の歪みに巻き込まれ、異世界へとトリップしてしまった。

そこは神話の息づく、ファンタジーの世界。出会った少女を助ければ彼女はまさかの訳ありで、逃亡生活を余儀なくされて……しかも帰る方法無し！？

ファンタジーな世界に迷い込んだ高校生と訳あり巫女達の逃避行

を描く物語、ここに誕生です。

プロローグ

とある日曜日。俺、<ｒｕｂｙ><ｒｂ>神楽有馬</ｒｂ><ｒｐ>(</ｒｐ><ｒｔ>ゆうま</ｒｔ><ｒｐ>)</ｒｐ></ｒｕｂｙ>（１８歳）はその日、近くのコンビニで昼ご飯を買って、家に帰る途中であった。

冬も半ば、厳しくなってきたこの時期。俺は煮込み饂飩を購入し、身体の内側から温めようとしていた。

「こういう寒いときはラーメンでも良いんだけどな……」

などと言いながらも饂飩を選んだのは、何となく、である。実際、俺の好物は麺類だが、何を食べるかはその時の気分によって、饂飩、蕎麦、中華蕎麦、パスタなど様々だ。

「しかし、今日はいつもより幾分風が冷たいな」

そう愚痴をこぼしながらも、足取りを確かに、自宅へと足を進める。

早く、寒い外から暖房の効いた室内へと入りたいという意思の表れか、幾分歩調が速いのは気のせいか。

しかし、コンビニから出て五分程度経ったところで急に体に異常を感じた。

（何だ、これ……）

いや。異変があるのは、自分ではなく自分の周囲だろうか。

最初は、眩暈かと思った。だが。違った。世界が、歪んでいる。まるで波立つ水面を見るかのように、周囲の光景が浮き沈みしているかのような、皺が出来ているかのような。とにかく形容しがたい歪みが、視界全体、見回す限りに広がっていた。

何だ、これは。そう思い、思わず足を止めてしまった俺は決して咎められるべきではないだろう。

やがて、それは重さに耐え切れなくなったかのように。

キキキキキキ……と、不吉な音を立てながら、ピキピキ、と

ひび割れていった。
本能で察してしまった。
これは、まずい……。何がどうしてどのようにって具体的にはわかんないけど……でも、かなりまずいっ！
これ以上ここに留まっていると、とてつもなく大変な目に遭う気がする、と。
だが。同時に、気付いた。……逃げ場が、ないことに。
前後左右、四方八方どちらへ行こうにも、もう手遅れ過ぎた。
ひびは既に自分の周囲、果てには頭上まで球場に自身を包んでおり。もはや何処にも逃げることが出来ない状態だった。
「何だよ、これ……何なんだよ、これ……」
思わずその場で叫んでしまった。
いきなり周囲の光景が歪んだかと思えば何もない空間にひび。立て続けに異なことがおきて。
俺はもう、既にオーバーフロー状態、俺のライフはもう零だ。
そして。
そんなわけがわからず頭を抱え込んでいる俺を取り込んだままで。
――……パリイイイイィィィィィィン……と、空間は、抑え込んでいた力に耐え切れなくなったかのように。

強烈な光を発して、爆ぜた。

「ん……ぅ、あぁ……」
強烈な光が収まってから数分して、眩んだ目もやっと元に戻った。
一体何が起きたのか理解が及ばないままに、しかし周囲がどうなったのか確認だけはしたいと本能の赴くままに目を開ける。
すると……。
「……何だ、何処ここ……」
そこに広がっていたのは、石造りの、湿っぽい通路だった。
「え？　？」

そして。目の前には、鉄の檻と、その中に入れられ、枷を嵌められた、巫女装束の少女だった。
「……はぁ……。マジ、何なんですかこれは……」
もはや理解不能。もうどうにでもなれ、と開き直った。

◆

ん……。
頭、痛い……。
ここ、は……え？
牢屋！？
何で……はっ！？そうだった、私、捕まっちゃったんだ……。
私の名はシール＝デストラクティ。
一応……とある『巫女』を務めている。
今朝、と言っていいのかはわからないけど、目が覚めたら私は第一級手配犯になっていた。
新聞に載っていたのでそのことにはすぐに気付いた。
でも、理由はわからない。ただ、新聞を見た限りでは、市民に不安を煽り、治安を悪化させているだの、在りもしないホラを吹いているだの、散々な理由。しかもそのどれもが出鱈目だった。
とにかく、第一級といえば捕まれば弁解の余地なく処刑だ。
そう考えて、家の外に出た…まではよかったが、既に遅く、家は包囲されていた。
抵抗虚しく、私は取り押さえられ、暴れたものだから気絶させられてしまったんだったっけね。
そして、現在に至る、と。
はぁ……。取りあえずは現状を確認したいし、看守でも呼んで説明でもしてもらおう。じゃなきゃ気が済まない。
「誰か！　誰かいないのですか！」
……。

返事は何もない。うんともすんとも聞こえない。
はぁ……これじゃ状況は解らず仕舞い、かな。どうしよう……。
考えても致し方ない、か。それに第一級犯罪だと状況確認したところで結果は目に見えている。即ち、私が辿る運命は形だけの裁判をして処刑、というのに他ならないだろう。なら、何を考えても無駄だろう。
気落ちして、自分の腕を見る。正確にはその自由を奪っている枷か。
そこにあるのは、魔法……と言うより魔力を出せない、ということからおそらくは魔封じの枷だ。
魔法が使えなければ、私は雑魚も同然。
なら脱出も不可能。もとより一国を相手取るなど具の骨頂だからする気も起きないが。
致し方ない。もう一度そう結論付け、寝っ転がって頭の後ろで手を組んだ。……やっぱり枷がある分、いくらか心地悪いな。
「ん、ん〜……」
何もすることがなくて、何の気無しに手の甲の紋様？　を見た。
そういえば、この紋様は生れつきこの位置にあった。
これは、何なんだろうか。母さんや父さんはこれについては一切教えてくれなかった。
知らなくて教えてもらえなかったんじゃなくて、知っててなお、隠すかのように教えてもらえなかったって感じだ。
何なんだろうか、これは。
ウ〜ン……駄目だ。今は何を考えても増えるのは疑問ばっかりだ。解決策が見つからない。
……いや、そりゃまぁ、全うな理由で第一級犯罪、それなら理解できるけど？
心当たりがないどころか、理由がめちゃくちゃじゃん！　そんなんで処刑されたんじゃ堪ったもんじゃないでしょ！
まぁ、弁明の余地なく処刑台行きの私にはそんなこと言える立場

もない。
「はぁ……」
ため息をついて、再度頭の後ろで手を組んだ。
どれくらい時間が過ぎただろうか。
「暇だな……ん？」
急に、奇妙な音が聞こえ、その音源の方を見れば、鉄格子の向こう側で空間に歪みができていた。一体何だろう。
気になってそちらを見ていると、次第にその空間自体にひびが入り。
――……パリイイイイィィィィィィィィン……と、弾け飛んだ。
「きゃっ」
不自由な腕で顔を庇う。別に悪影響がなかったからよかったが、もし破裂した空間が固定されたままだったなら、破片が刺さって満身創痍になっていただろう。
そして、破裂した空間を見て、呆然とした。
何故なら。思いもよらない光景が、そこにあったからだ。
「え？　人……？」
そう、それは見たことのない服装の、白い袋を手に持った男性だった。
「……はぁ……。　、　　……」
そして、その男性は、意味不明な言葉を喋っていた。

１―１　脱走のお手伝い？

さて。開き直ったところで落ち着いて現状確認をしてみようと思う。

まず、俺は昼飯を買った帰りに、何かわけのわからん現象にあった。それは周囲の風景にひびが入って、その数瞬後に風景が割れて気が付いたらここにいたと。うん、これについては情報を集めてから考えれば良いとして。

問題はここがどこか、だよな。

俺はここで我にかえってから、一度も方向転換をしていない。そしてそんな俺の目の前、真っ正面にあるのは……無数の縦線だった。

無限の縦線は触って見れば鉄製……つまりそれは牢屋の独房だ。そして、その中では、巫女装束の少女がペタンと座り込んでこちらを見ている。

この状況に思うことはいろいろあるのだが、とりあえず言いたいのは。

「……それで、これはまた一体どういうことなんだ？　自分が牢屋ってわけじゃないのは良いんだが……何でこんなイタイケな少女が牢屋ん中なんだ？」

まぁ、考えたところで事情はわからないが。取りあえずは閉じ込められていては可哀相なので、牢屋の鍵を外して枷も外してやる事にした。

「……鍵……何処だ？」

出してやることにしたのだが。しかし、肝心の鍵が見当たらない。何処にあるのかと辺りを見渡し、周辺を探し回り……何やらテーブルの置かれた小部屋の壁に、鍵がかけてあるのを見つけた。

喜々としてその鍵を取ろうとするが。そこでまたもや、厄介なことに気が付く。

「……あれ？　あの牢って何て書かれていたんだっけ？」

そう。鍵の上に、文字のような数字のような、おそらくは数字なのだろう記号が振ってあったのだが、如何せん直前の怪奇現象で呆然とし、半分自失していたので良く見ていなかった。これじゃあ開けようとしている牢屋の鍵がわからない。まずったなぁ。反省反省。

再度、少女の入れられている牢まで戻って、記号を確認すると（因みに少女は怪訝そうな顔で再度現れた不審者＝俺を見ていた）、再び鍵のところまで戻る。そして、今度こそ正解の鍵を取り、その鍵で牢屋を開けた。

「……」

すると、少女は少し考えるような間を置いた後、牢屋の中から恐る恐る出てきた。何だよ、俺は何もしないぞ？

「　　？」

そして、俺に何かを聞いてくる。だが、少女よ。何を言っているのかさっぱりだぞ。英語はそれなりに出来る方ではあるが、これは英語ではない。もっと違う、他の言語だ。

これはいよいよ困ってきたな。出来ればここがどこなのか、出口を知っているなら道案内してほしかったんだが。しかたないか。意思疎通できないと、無理だもんなぁ、こればかりは。……仮に英語でも、意志疎通できるほど出来るわけではないのだけど。

「ゴメン。何て言ってるのかわかんないよ」

「　　？」

「……本当に、ゴメンな」

「　　」

何かを言ってくるが、言葉がわかんなければ返しようがない。そうなれば会話は出来ない。だから、意味がないとはいえ、謝罪を入れる。

少女はもう一度顔色を変えて再び何かを言ってきたが、それも勿論わからないので重ねて謝罪する。それで話が通じないとわかったのか、急に黙り込む。

だが。少女はまだ、諦めていないようだ。言葉の代わりに、ジェ

スチャーで俺に意思を伝えてきたのだ。
少女はまず、枷を指差し、次に枷の鍵穴を指し。そして最後に鍵を回す仕種をして見せる。
『枷』『鍵穴』『鍵を回す』と来れば、答えは簡単だな。つまりは、枷を外してほしい、ということか。そういえばうっかり牢屋の記号見落としていたのに焦ってすっかり鍵の枷を忘れてたな。
まぁ、どれが枷の鍵か、わかったもんじゃないから、俺に出来るのは、あの監視室っぽい部屋に案内して一緒に探してもらうだけだ。
少女に目配せをして、先程の鍵が置いてある部屋へ連れていく。どうやらついて来てほしいという意図が伝わったようだ。
そして部屋へたどり着くと、少女は俺の意図が完全にわかったのか、勝手に部屋を物色し始める。
よほどこの部屋にあるかどうかに期待を寄せているらしく、かなりの興奮気味だ。
とりあえずは頼まれたからには、俺もこの部屋を物色することにした。

十分くらい経っただろうか。正確にはわかんないけどさ。
この部屋の中には、いろんなものがあった。羽根ペン、紙、インク、替えの蝋燭、わけのわからない文字で書かれた書類に液体が入った瓶、粉末が入った瓶。
最後の二つは何なのかわからんが、やばい薬だったら困るので放置したが。
そして、いくつかある棚のうちの二つを調べ終えた時点で、不意に服を引かれた。
「ん？」
そこには、鍵を持って、何かを懇願するような表情をした少女がいた。何を懇願しているのかは、聞くまでもないだろう。
見つかったかもしれないので、試してみてほしい、ということか。
……まぁ、自分で出来るだろう、って言葉も浮かんだけど飲み込ん

だ。言葉通じないし何よりわざわざ持ってきたってことはなにか理由があるのかもしれないし。
だから俺は何も躊躇わず、鍵を受け取り、差し出された腕に嵌められた枷の鍵穴に、鍵を押し込んだ。
そして。どんな鍵が枷の鍵かわからない手探り状態だったにもかかわらず。まさかの一本目の鍵で、少女の枷は外れた。
一瞬、唖然。と同時に、ほっとする。もし見つからなかったらどうしようか、という感情が少なからずあったし。そして、少女の顔を見て、顔が綻んだ。
それはもう、艶のある黒い髪に似合う、太陽のような笑顔で、その青い瞳を俺にむけてくれているのだから。

◆

視線の先にいるのは先程現れ、理由は不明だが私を牢屋から出してくれたばかりの男性。
私的感想を言えば、理解不能の一言に尽きる。
何やらわけのわからない言語でつぶやいていたかと思えば、いきなり立ち去ってしまった。即座に戻ってきたと思えば、牢屋のドア付近を見回して、慌ててまた立ち去っていった。
そして、三度目に現れた時には牢屋の鍵を持っていた。そして驚くことに、私を解放したのだ。……枷があるから、正確にはまだ完全ではないけれど。
しかし気になる。この男が何故私のことを助けるのかが。第一級犯罪者なのだから、こんなことしても自身に不利益になるだけなのに。でも、助けたのは何故なんだろう。
考えてもわからず、
「何故私を助けるんですか？」
男に聞いてみたが、男は何にも答えなかった。
それどころかなぜか困ったような顔をした。聞いてはまずいこと、

だったのだろうか？　それはそれでさらに気になるけど……。
でも話してくれないんじゃ仕方ない、かな。
と、そんなことを考えていたのだが。
「　　」
しかし、男のその話を聞いて、しかし可能性もあるかもしれないと思った。
済まなそうな顔で何かを言っきたのだが、言葉は相変わらず何と言っているのかわからない。だからこそそう思ったのだ。
先程から喋っている謎の言語はもしかすると彼の国の言語なのではないだろうか。だとすればこの大陸で使われている言葉がわかるとは限らない。
なら、答えなかったのはもしかしたらこちらの言っていることも向こうには伝わっていないのではないか。
しかしまだその確証はなかった。だから、
「ヴァルスティル大陸語がわかりますか？」
と聞いてみた。
結果は……やはり。彼はこの大陸のものでなく、この大陸の言葉を知らない。
「困りましたね……」
本当に、困った。
魔術を使えば何とかなるけど……今は使えない。
原因はやはり枷だ。この枷は魔力を体外へ出せなくする魔を封じる枷。自身に対する補助魔力ならともかく、他の魔術では使うことが出来なくなるのだ。
何とか意思疎通が出来ないものか……。
そう思い悩み、しかしすぐに答えは見つかった。
なんだ、簡単じゃない。枷を外す手助けをしてほしいということくらい、言葉じゃなくても簡単に表現出来る。
そう思い、私は枷を外してほしい旨を伝えた。

そう、それがついさっきのこと。
そして今は、その男に案内されて、監視室で枷の鍵を探している。牢屋の鍵があったのなら、枷の鍵もあると思う、と言いたいのだろう。ありきたりだけど、ないとは言いきれない。この部屋にも一応未使用の枷があった。ならば、当然枷の鍵もなくてはならないはずだから。
――絶対に、見付けてみせる。私は折角逃げ出す機会を得た。わけのわからない理由で処刑されるくらいなら、巫女としてあるまじき行為で会っても、破戒して生き延びて見せる。
そんな焦る気持ちで部屋を引っ掻き回していたら、
「……っと、これ、かな……？」
一本の、小さな鍵を発見した。
でも、これではまだ、例えそうだったとしてもまだ足りない。
魔封じの枷を外すには、これだけでは足りない。枷を外す鍵と人。これらが揃って、初めて外れるのが、魔封じの枷の厄介なところだ。
だからこそ、この男に協力を頼んだのだ。
私は一緒になってこの部屋で鍵を探してくれているこの男に近寄り、その特徴的な衣服を引っ張った。
「？」
声をあげながら、疑問顔で振り向いてくる。が、鍵を差し出すと、すぐに事情を察してくれたらしく。
私が見つけたこの鍵を、早速試してみてくれた。
結果は……なんと、一発目で当たりだった。なんて幸運。やった！
顔が綻んでいくのが、自分でもわかる。これで、生きていける希望が、見つかったのだから。

1―2　疎通の魔術

少女を助けたのは良いが。意思疎通が殆ど出来ないからなぁ。どうしたものか、困ったものだ。

とりあえずはここはまだ牢。誰か来てからではまずいし、先ずはここから出よう。

幸い、出口らしい階段は本来なら看守がいるであろうこの監視室から出てすぐのところにあるのをついさっき見たばかりだ。

だから問題はない。と、思いたい。

さてさて、いつ看守が戻ってくるかもわかんないし、さっさと行きますか――と、歩き始めたら。

――クイクイ、と服を再び引っ張られた。いや、そんなに服引っ張られると伸びるから止めてほしいんだけどさ。ほら、背丈が同じくらい……まぁ、俺男でこの人女だから多少違うけど、大した違いがないんだから肩叩くとか別の形で意思疎通試みようぜ？

と、そんなことを心ん中で思い浮かべて内心苦笑しつつ少女に振り向くと、少女は俺の額に手を添えて、何やらボソボソと呟く。

「……？」

呟きが終わると同時に、少女の手が光り、そしてその直後に俺の体も包まれる。……今日は俺、良く光に呑まれるな。

「どうでしょう。言葉がわかりますか？」

「に、日本語！？」

んな！　馬鹿な！　さっきまでこの少女、わけのわからん言語をしゃべっていたのに、何で急に流暢な日本語しゃべっているんだ！？　まさか、今まで俺、騙されてたのか！？　豊富秀吉より策略家だな、おい。いや、別に秀吉関係ないけど。

「わかるのですね、私の言葉が」

「ああ」

先程も聞いた、この鈴の音のような綺麗な声で紡がれるその言葉

は、どう聞いても日本語のそれだ。
「よかった。これでやっとまともな疎通が出来ますね。先程はありがとうございました。魔術も扱えるようになりましたし、命も救われました」
「そ、そうか……それはよかったね……」
実際、目の前に監禁された女の子がいて、それを助けないやつは社会的にダメだろ。
……って待てよ。今、それとなく妙な単語が入ってなかったか？
確か、魔術って……魔術、だよなぁ。小説とか漫画とかで出てくる、不思議パワーのことだよな。因みに超能力でも可。って、それは今は関係ないな。
で、何故にその魔術？　しかもあたかも実在して、扱えることが当然であるかのような口調だ。これは一体……？
「なぁ、一つ聞いていいか……？」
「……？　構いません。が、何でしょうか」
「……魔術って、何？」
「え！？」
おおう、こりゃすごい驚きようだ。
そんなに驚くことないだろうに。
「魔術を知らないのですか！？　斯様な状況で何をご冗談言っているのです、生活の基盤なのですよ！？」
え？　生活の基盤？　何だそれ？
「魔術って――」
「――待ってください。この状況で話すのは些か無用心です。貴方だって、罪に問われるということを覚悟した上で囚人を脱走させるようなことをしたのでしょう？」
言葉被せられたよ。無理矢理話切られた。つか、囚人！？　この巫女さん犯罪者だったのかよ！　そして勝手に歩きだした。
「犯罪者だったのかよ！」

「目茶苦茶な冤罪を被せられているだけです。民に不安がらせる戯れ事を吐くなど巫女として言語同断。それ以前に、そんな理由で死刑罪に出来ると思いですか？」
……ん？
「それ本当か？」
「ご信用していただくか否かは貴方次第です。が、私は嘘をついておりません」
「……そうか。じゃあ、信じさせてもらおうかな」
「え？」
若干間を開けたものの、あっさりと信じたことに疑問に思ったのだろう。
まぁ、実際には少女の証言を吟味して、確証を得たんだけど。
それは今は別にいいだろう。それより、さっきの気になる言動。もう一度聞き直さないと、なんか気が済まない。
魔術は如何にも日常的な存在です、なんて言動、信じられないのだが。正直いえば、それを聞いてから妙に嫌な予感しかしない。
「で、話逸れたけど、魔術って、オカルトじゃないのか？」
「まだそれを言いますか。と言うより、聞き慣れない言葉が出ましたが、おかると……でしたか、何でしょう、そのおかるとというのは」
いや、オカルトってオカルトだよ。他に言いようなんてねぇぞ。いや、あるか。あれだ、架空の存在だろ？
「架空の存在じゃないのか？」
「……、」
全くもって当然の回答といわんばかりの俺の話を聞いて、少女は一瞬、可哀相なものを見る目付きになる。いや、なんでだよ。
だが、次の瞬間には怪訝そうな顔をして、最後には物凄く真剣な顔して、歩きながら考え込み始めた。
忙しないというか何と言うか、まぁ見ていて飽きないのは確かだ。
そして、しばらくすると一通り考えがまとまったのか、深刻そう

な顔をして、俺に話し掛けてきた。
「一つ聞きましょう」

◆

やっと腕が自由になった。うーん……やっぱり自由が一番いいよね。目が覚めてから多分だけど半刻も経っていない。だというのに随分長い間拘束されていたようで、この開放感もかなり久しく感じる。

助けてくれた……もとい、脱走を手伝ってくれた男に感謝をし、せめてここから出るまでは一緒に行動しよう。そう思って、男の方を見てみれば、部屋から出てどこかへ行こうとしていた。

なんて無用心な！　罪人収容所は街中にあるだろうが、死罪を収容するところといえば、城しかない。何故知っているかといえば、知り合いがこの国の軍隊の、魔術隊にいて、そんな様なことを前に聞いていたからだ。

話が逸れたが、ようはここは城、それも首都なのだから王城。それなりに警備も厳しい。見張りに見つかったらどうするつもりよ！

しかも見慣れない恰好だし言葉も通じないんだから絶対話が拗れる。

そう思い、慌てて服を引っ張って、引き止める。

男はすぐに振り向いてくれた。……何、その迷惑そうな目つきは……ああ！　そっか、そういえばさっきから服引っ張ってばかりだった。

ゴメン、と内心謝りながら、男の額に手を乗せて。

「『聖なる加護の光、その力を以ってこの者の言語の壁を取り除け……』」

言葉を、呪いを紡いだ。

瞬間。私の手から光が発せられ、男を包み込んだ。

意思疎通の永続魔術で、一種の加護にも等しい。これでこの男と言語による意思疎通が出来るはずだ。

だが、万が一効いていない、ということがあっては困るので、一応聞く。
「どうでしょう。言葉がわかりますか？」
「に、日本語！？」
男は心底驚いた、という顔で私を見てくるが、意外なことではないだろう。今まで散々別の言語で、言葉が通じないと思って諦めていた矢先のことなのだ。急に自国の言葉が聞こえてきて驚かないはずはない。
因みにこの男がこの大陸の言葉を話しているわけではない。男の言葉が示すとおり、男には聞いた話の内容が自国の言葉に聞こえるだけだ。さらに言えば私もそうだ。男の言葉がこの大陸の言葉に聞こえているだけで、男がこの大陸の言葉を喋っているわけではない。
私自身ではなく男に魔術をかけたので、私以外の人がこの男と会っても同じ効果が得られるところがお得なのがこの魔術である。
「わかるのですね、私の言葉が」
「ああ」
念を押してもう一度聞いて見るが、大丈夫なようだ。
あぁ、よかった。これでまともに意思疎通できる。
「よかった。これでやっとまともな疎通が出来ますね。先程はありがとうございました。魔術も扱えるようになりましたし、命も救われました」
「そ、そうか……それはよかったね……」
……いや。そんな当然のことをした、っていう顔で見られてもこっちも助かったのは事実だし……『そんなに感謝されても困る』なんて顔されるのもなんかいただけないな。お礼はきちんと受け取るべきよ、少年。
そんなことを思っていると、不意に男が怪訝そうな顔をしていることに気付く。
「なぁ、一つ聞いていいか……？」
「……？　構いません。が、何でしょうか」

もしかして、何故あんな状況に、って言う質問だろうか。だとしたらなんて答えよう……。
「……魔術って、何？」
「え！？」
だが、そんな私の困惑を余所に、男が聞いてきたのはそんなどうしようもないことだった。
っていうかそんなわかりきったこと、こんな状況で普通、聞く？
冗談でも言ってるの、この人は。
「魔術を知らないのですか！？　斯様な状況で何をご冗談言っているのです、生活の基盤なのですよ！？」
「魔術って――」
こんな状況で落ち着いて話すほどの余裕は、ないだろう。意味のない質問は控えるべきだ。男にもそれをわからせようと叱咤したが。あろうことか、食い下がってきた。
……仕方ない。無理矢理終わらせよう。
「――待ってください。この状況で話すのは些か無用心です。貴方だって、罪に問われるということを覚悟した上で囚人を脱走させるようなことをしたのでしょう？」
そう言って、私は歩き始めた。
……あ、言ってから気付いた。そういえばさらりと重用なことを言っちゃったな。どうしよう……。
「犯罪者だったのかよ！」
やっぱり怒鳴り散らされた！　……仕方ない、こればっかりはミスだ。場所が場所、状況が状況なだけに言い逃れは出来まい。大人しくすべて話して、出方を伺おう。
そう思い、自分が捕まっていた理由を話すと。わけわからない、とでも言いたげな顔で、
「それ本当か？」
と言ってきた。当然だろう。こんなこと、本気で信じる人は少ないと思う。

「ご信用していただくか否かは貴方次第です。が、私は嘘をついておりません」
男は少し考える素振りを見せた上で、
「そうか。じゃあ、信じさせてもらおうかな」
「え？」
あっさり信じてくれたようだ。
いやいや、それはいくらなんでも軽率過ぎないかい、少年。少しは疑わないと、そのうち騙されるわよ？
だが、少年はその話はそれで終わりと言わんばかりに話題を変えてしまう。
「で、話逸れたけど、魔術って、オカルトじゃないのか？」
……訂正。変えたんじゃなくて戻しただけだわ、これ。まだそんな冗談を……ん？　おかると？
「まだそれを言いますか。と言うより、聞き慣れない言葉が出ましたが、おかると……でしたか、何でしょう、そのおかるとというのは」
「架空の存在じゃないのか？」
架空の存在。それがおかるとの意味……いやいやいや、それこそありえないよ。どうやったら生活の基盤足る魔術が完全に架空のものになるの！？
と、そこまで考えて、ふと今までの記憶を遡る。
男は確かに、魔術は初めて知ったかの様な顔をしてた。それに、疎通の魔術も同じ反応だ。初めて見た、という感じ。私のは永続的なものだからあれだけど、普通のものは冒険者の間では結構日常的で、別段驚くほどの者ではない。
だが、仮にも魔術は生活の基盤、そうそう忘れるものではない。別の大陸でも同じ様だし、地域が違うから、というのでは通用しないだろう。
……なら、記憶喪失……？
いや、それはないだろう。記憶喪失になっていても言語が大丈夫

ならば、魔術についてもすぐに再習得する機会に恵まれる。
なら、私と会う直前に記憶喪失になった？
ありえない。何故ならそれにしては意識のありすぎる行動をしていたからだ。
と、そこまで考えて。ある重要なことに思い当たる。
――私と会う直前？
そう。重要な情報が、そこにあった。
――この男が、どうやって現れたのか。
それは衝撃的だったから目に焼き付いている。空間の、歪みだ。
ならば。記憶喪失以外で。魔術を知らなくてもおかしくない理由とは何なのか。
幸い、私は巫女。そういうことに関しては他よりは詳しい。それについては思い当たるものが一つ、ある。
でも、まだ、足りない。確証が、ない。だから。
「一つ聞きましょう」
確証を得るために、私は男に問い掛けた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3852z/

異世界逃避行幻想譚～異世界人と巫女達と神々と時々邪神～

2011年12月18日09時56分発行